研究班番号【 14 】

「枕草子」で探る本当の幸せの見つけ方

国語班:秋山　福来

Abstract

The purpose of This study is to know how you can be happier.
To know the way of Sei Shonagon's thinking will give a hint to that.
The experiment shows that she liked nature but also discriminated against the lower classes.
Classes was important in the Heian period.This study suggests that individual thoughts are influenced by the society.

要約

本研究の目的は、現代人がより幸福になるための手がかりを得ることである。そこで「枕草子」から鋭い感性を持つ清少納言の考えの特徴を知ることで、日常生活に活かせるのでないかと考えた。調査によって、清少納言は月やほととぎすなどの自然を好む一方で、激しい身分差別をするということがわかった。平安時代の社会は身分を重んじるものであった。従って、個人の考えは社会の影響を受けるということがいえる。

1. はじめに

現代の日本の社会では、金銭的な利益ばかりが求められてきた。そのため、生産や科学技術の向上に結びつかない文学や芸術は軽視されてきた。しかしそのような社会に生きる人々は、自身の夢の実現や幸福の追求といった人生を充実させることを目的として行動することが難しくなっていると考えた。そこで本研究では、人々が自然や文化と普段から深く関わっていた平安時代に、物事を鋭く豊かな感覚で捉える清少納言によって書かれた「枕草子」から、清少納言が思う本当に良いものを考察し、現代の価値観と平安時代の価値観を比較した。そして現代にはないものの見方や、現代にこそ見直すべきである、幸せに生きるということへの手がかりを考察した。

2. 研究手法

「枕草子」の原文、現代語訳を読んだ。
①清少納言が本文中でよいとするものを調べた。
②清少納言のものごとの見方、考え方の特徴を調べた。

3. 結果

①よいものとして登場する回数が多いのは主に自然に関係するものだった。
②身分の高い人物を尊敬し、身分の低い人物を軽蔑した表現が多く見られた。

4. 考察

清少納言が好むものは、自然に関係するものでは月、ほととぎす、葵などが目立つ。他にも横笛など複数の章段に登場するものがあった。自然に関係するものについては、年中行事や季節を代表するものが多く、清少納言の季節の移り変わりに対する繊細な感覚が読み取れるが、清少納言の好みを特定できるほどの明確な共通点はない。

これらから、清少納言の感覚こそがものごとを清少納言にとってよいものにしているのではないかと考えられる。ものごとを鋭い感覚でとらえ、そこによさを見つけようとするため、清少納言のまわりはよいもので溢れているのである。

平安時代の貴族社会は、天皇を中心とする階級社会であった。そのため、清少納言のように身分の高い人を尊び、身分の低い人を粗末に扱うのは当然のことだったのかもしれない。現代の日本人にとって身分差別は理解し難い問題である。なぜなら身分という考えが存在しないからだ。しかし現代にも身分制度が残っていれば、多くの人が清少納言と同じように差別をしただろうと推測できる。

５．結論

清少納言が身のまわりのものごとから、鋭い感性によってよいものを数多く見つけ出したように、幸せとは身のまわりの幸せに気づいている状態であるといえる。すなわち、幸せになるためには、様々なことに関心を持ち、積極的にものごとに働きかける必要がある。感性をより豊かに、鋭敏にする方法は今後考えていかなければならない。

また、個人の考え方は、清少納言が身分差別をしたように、社会や外部からの影響によって形成されるのか、もしくは生まれ持ったものが大部分を占めるのかという問題についても研究したい。

６．参考文献ならびに参考Webページ

清少納言著　島内裕子校訂　訳 「枕草子」 株式会社筑摩書房発行